

# アンドルー・ヤラントンの経済論 (1)

内 田 忠 寿

## 第1章 序 説

### 第2章 ヤラントンの著作ならびに生涯

#### 1 その著作

#### 2 その生涯

(以上本号)

## 第1章 序 説

アンドルー・ヤラントン (Andrew Yarranton 1616—1684?) は内外ともに多事であった17世紀イギリスで、波瀾に富む活動的な生涯のあとに二つの経済書を残して世を去った一郷紳である。その経済書というのは、主著として1676年10月4日付でロンドンにおいて出版認可をうけた『海と陸とによるイングランドの改善』(England's Improvement by Sea and Land, pp. xx+195, with 8 folding plates, London, 1677) であり、他のひとつは1681年に同名の著書の『第2部』(The Second Part, pp. vi+212, with 7 copper-plates, London, 1681) として刊行されたものである。

アンドルー・ヤラントンはすぐれて時代の子であったといえるであろう。彼はいかにもイギリス人らしい実践的な技術家職業人で、前半生においては数種の職業を遍歴したあと、17世紀なかばの市民革命の「大内乱」の渦中に投じ、議会派の軍人として戦った。そして戦い終わった反革命の段階では、プレスビテリアンの信徒として、ある意味においてこの宗教戦争時代の犠牲者であった。ようやく彼が実践的ないわば「産業コンサルタント」の仕事に戻って大陸に旅行中、こんどは17世紀後

半の蘭英戦争に巻き込まれた。上掲の二著は、この後半生に彼の全生涯の経験を織りこんで著わされたものである。

しかしヤラントンが時代の子であるというのは、このように彼が生きた時代の外面的事実から彼の生涯が殆ど奔弄されんばかりの影響をうけたということだけによるのではない。それだけであるならば、彼はたんに消極的に時代の子であったにすぎないであろう。事實は、彼はこの苦難の時代のなかから、英国が、いな、英国を先頭にした近代世界全体がつぎの300年に歩むべき道——その道は1970年代の今日では行きづまり、おそらくは終端にまで達した——を予感し、その新しい道の積極的開拓者として時代の先端に立ったのである。歴史家アーノルド・トインビーはこの時代の特徴をつぎのごとく捉えているが、それはわれわれがヤラントンの歴史的位置づけを考える上できわめて適切な示唆を与えているように思われる。

「17世紀の初頭は、西欧キリスト教世界の宗教戦争がたけなわであった時代であり、西欧のキリスト教的狂信はいまだにその頂点にあった。この世紀が終るまでに、西欧社会の精神的指導者たちの関心と探求の対象は宗教から実験科学の発見を応用する科学技術に移された。世紀が終った頃には、この西欧人の態度と精神的気風の革命的变化が、いまだ少数の人々のあいだに限られていたことは確かであるが、しかしたとえ少数といえども、これほどの短期間に、これほどの大転換にふみきった者があるということは驚くべきことであ

る。それにもまして、彼らが社会の他の部分を動かして彼らの進路に追随せしめたということは、さらに驚くべきことである。18世紀のはじめから1956年に至る250年間に、世俗化の気運と科学技術への興味とは、西欧社会の一つの層から他の層へとひろがり、ついにはその社会の全体に浸透した<sup>91)</sup>。」

ここに読みとられるのは、伝統的キリスト教への不信によって西欧近代人の心情と頭脳に残された空虚が、西欧文明の精神、いな、人間性そのものに内在する実験的態度と技術的傾向によって満たされねばならぬとする西欧人の決意である。トインビーは「17世紀西欧人を動かして、このように意識的にその財宝を宗教から科学技術に移させた動機は、第一には宗教的狂信の害毒と破壊に対する恐怖」であり、第二には「一つの心理的事実の認識であって、宗教に比肩しうる力をもつならぬかの心理的等価物を自らのために用意することができなければ、従来西欧の人間の心にとりついて離れなかった、相争う戦闘的宗教に対する関心から自己を解放することは不可能であろうという自覚」であったと考えている<sup>92)</sup>。そして彼らのためこの社会奉仕を行ってくれるものとして、科学技術が迎え入れられたのであった。それではその社会は新しく出現してくる技術家たちをどのように見ていたのであるか——

「宗教戦争の直後には、技術者と実験家とは、神学者に比べて人間が友好的であるのみならず、たとえ悪事をはたらきたいと思っても大した害をなす能力がないもののように見えた。17世紀の末葉には、彼らの大部分は宗教の面でも政治の面でも権力には縁の遠い人々であった。彼らのあいだにあっては、『場所を奪われた人々』と参政権を奪われた非国教徒が多数を占めていた。当時の人々にいまだに身近なものであったいくつかの形態のどれかによって、彼らが権力を握るというおそれは全くなかった。そしてこの段階にあって

は、一見したところ無害な技術者たちが論争のたねとなることのない彼らの発明によって、彼ら自身の手ではないとしても他の人々の手で既存の平衡を覆すために使用されることになるような、新しい種類の力を造り出しつつあったという事実を悟る者は一人もなかったのである<sup>93)</sup>。」

アンドルー・ヤラントンはここに言われたトインビーの意味での「技術者・実験者」に属した。そのゆえに彼は時代の子であった。それは人類がかつて経験したことのない新しい経済時代の能動的設計者であり、積極的開拓者であったという意味においてまさしくそうなのである。そうして上掲の二著こそ彼が同時代人の行く手はるかに掲げた道標であったと看做されうるであろう。

それらの書物は、しかしながら、著者の歿後とはかく忘れがちな運命をたどらねばならなかった。それでも、やがて年経て、政治経済の学ないし経済思想の歴史が回顧せられたさい、殆ど埋もれんばかりであった古色蒼然たるこれらの本に、眩いばかりの照明が当てられた稀なるいくつかの場合は存した。そうした最初の機会には、彼の主著が出版されてから実に177年の歳月を経た19世紀中葉になって訪れたのである。すなわち政治学者パトリック・エドワード・ドーヴ(Patrick Edward Dove)は1854年に上梓した『政治科学要論』(*Elements of Political Science*, Edingburgh)の付録に、『英国経済学の創建者 アンドルー・ヤラントンに関する講述』(*Account of Andrew Yarranton, The Founder of English Political Economy.*)という68ページにわたる長文を添え、このなかで、ヤラントンこそ「平和は戦争にまさり、交易は掠奪にまさり、正直な産業活動は軍事的偉大さにまさり、そして政府の最善の職務は国内における繁栄の確保と他国に対する不干渉であることを看取し、これを喝破した最初の英国人である<sup>94)</sup>」と述べ、彼ヤラントンを呼ぶに実に英国経済学の「真

正の創建者」(“the genuine founder”)という、ひとの耳目を惹くに足る称呼をもってしたのである。

つづいて1863年には、有名な『自助論』の著者サミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles)が、その著書『産業家伝』のなかでヤラントンのために一章を設けた<sup>5)</sup>。スマイルズは始めてヤラントンの生涯に関する原資料の探索につとめて彼の事業を詳述したのち、彼ヤラントンは「公共的精神と企画心に富む人物で（経済学 political economy が科学として認められる以前における）開明的な経済学者（an enlightened political economist）であった<sup>6)</sup>」と記したのである。

二世紀に近い忘却の淵からの19世紀中葉におけるヤラントンの「発見」は、ドーヴおよびスマイルズによってこのように殆ど熱情的に行われた。けれども、政治学者ドーヴの僅かに政治経済学的な評価の部分を除いては、それは概して英国の産業的前途を指示した彼の先見の明への称讃であり、また彼が行った英国各産業ならびに公共事業に対する技術的指導者としての貢献への再認識であって、経済学者の専門の見地からの彼の著書の検討は19世紀にはいまだ現れることがなかった。このことは、彼とはほぼ同時代の英国に生きたペティ (William Petty, 1623—87), ノース (Dudley North, 1641—91), ロック (John Locke, 1632—1704), およびバーボン (Nicholas Barbon, 1640—98) 等の著作がマカロック (McCulloch, J. R.), ロッシャー (Roscher, W.G.F.) を先頭とする19世紀の学説史研究者によって評価せられ、経済学史上の先駆者としての彼らの地歩が固められつつあったのとは対照的であったといわねばならない。

他方、はるかに極東の一角にあって多くの障碍と戦いながら西洋経済学の発達を刻明に跡づけようと努力していたこの国の学界においても、彼ヤラントンの主著は少くとも1930年前後に高橋誠一郎博士によって注目せ

られる所となり、多大の同情をもって紹介せられた<sup>7)</sup>。博士は前掲のヤラントンの著書を目して「もっぱら天性の機智と実務上の経験とに指導せられ、……実に国富増進をもって究竟の目的とせる、経済学発生以前における実証的経済論の面目を遺憾なく發揮したものと評価し、すすんで「17世紀の経済書中において最も特色あるものの一<sup>8)</sup>」であることを承認するに吝かでなかった。高橋博士のこの見解は、ヤラントンの殆ど知られなかった当時において、原著の味読からのみ得られたきわめて独自の評価の率直な表明であったと思われる。

このように、ヤラントンはその故国においてもわが国においても、19世紀の後半以降きわめて少数の識者によって注目されるようになった。事実、精魂を傾けて同時代人に呼びかけている、その殆ど中世英語に近い彼の文体は不思議な魅力を湛えているのであるが、特記に値するのはその書が注目されたところではいつでも高い評価をうけたことである。しかし経済思想史上の彼の地位が一般的な承認をとりつけたということはかつてなかったといつてよいであろう。一般的には彼はただこの時代の重商主義論客のひとり、せいぜいオランダ凌駕論者のひとりとして、著書の内容を検討されることもなく片づけられるのが通例であった。しかるに1954年に刊行された巨擘ジョーセフ・シュンペーターの遺著『経済分析の歴史』には、この忘れられた17世紀の経済論者に対する清冽斬新な再評価が含まれていた。この稿の筆者のかねてヤラントンに対して抱いていた興味をひとしお深めさせるに至った一因はここに存する。

シュンペーターは『経済分析の歴史』第2篇の随所でヤラントンの議論を取り扱い、彼の所説一般に対して次のような評価を与えた、「実際われわれは本文で叙述したあらゆる議論のすべてに対する権威の一人として彼をここに挙げうるものであるが、同様にして他の

題目についても彼を引用してきたし、今後も然りであろう<sup>9)</sup> (圏点は筆者付加)。ここでシュンペーターが「本文で叙述したあらゆる議論」というのは、幼稚産業保護論、外国繁栄論、雇用論、信用制度および利子論、食糧価格論等の広きにわたっている。すなわち、それはヤラントンが例外的に注意を払わなかった貿易差額論を除いて重商主義文献のとりあげる殆どいっさいの問題領域を覆う。そしてこれらの問題全般にわたってヤラントンは権威者のひとりとして看做されたのである。ヤラントンに対するシュンペーターの評価の並々ならぬものであることが察知されるであろう。ちなみにシュンペーターは、「英国経済学の真正の創建者」というさきにおれわれが示したドーヴの讃辞についても言及し、「これはもちろん不合理ではある」と斥けはするが、それでも「恐らく彼の名が全く無視されていたことに対する健全な反動であった」ことを容認するには吝かではなかった。そして彼に対する一般的評価として、「ヤラントンは多くの職業に通暁した多面的な人物であるが、若干の活動分野とくに農業技術の面では啓蒙的企画者として以上には高く評価されないであろう。しかし経済学においては彼はそれ以上の人物であった。彼の榮譽に帰する分析的獲物は少ないけれども、彼の多くの暗示や、ドイツおよびオランダの状態に関する多くの註釈には、ひとつの理論的図式 (a theoretical scheme) が含まれている。また彼が最も大胆に逸脱した場合においてさえ、終始殆ど非合理的な言明に墮することがなかったという事実もそれを証する<sup>10)</sup>」 (圏点は筆者付加) と述べているのである。

シュンペーターがヤラントンに与えたこのような高い評価の原因の一つが、ヤラントンが1677年という年代にこれだけのことを洞察したその年代の古さにあったことは彼自身の言明するところであるが<sup>11)</sup>、なおそのほかに17世紀における後者の素朴な経済発展論の図

式が、実にその根幹において、シュンペーター自身の1912年初版の名著『経済発展の理論』の基調に相通ずることへの直覚に基づくものがあつたであろうとわたくしは推測している。じじつ経済学的にヤラントンが最も評価されねばならぬ事柄は経済発展の論理の最初の把握者であつたことであろう。これらの事柄については後段において若干の考究が試みられるであろう。

われわれはヤラントン歿後の、二世紀に近い年月にわたつた彼の著書への忘却と、忘却の淵からの19世紀中葉におけるドーヴによる再発見、それにつづく再評価の経緯を上記することによってこの論文の導入部としたのであるが、以下の本論では主として彼の原著の内容の直接的検討を通じてヤラントン経済論の性格を見定め、あわせて西洋経済思想史上における彼の地位について若干の考察を加えたいと考えている。しかしその場合におけるわれわれの研究の基本態度はシュンペーターのそれのごとくもっぱら「経済分析」の歴史のなかで彼を捉えようとするものではない。また前世紀のドーヴやスマイルズのように、イギリスの経済的繁栄の予言者、英国民の精力をその方向へ転換せしめた産業の企画的指導者として彼を讃えようとするのではさらさらでもない。もとより彼の議論を、経済をもって国家富強の用具と見る重商主義著作家のひとりのもので位置づけることが全面的に誤りであるとは言えないから、われわれは彼の特質を強調するにしてもかかる視点を無視することはないであろう。しかしわれわれにとって現代という時期にヤラントンを問題にすることは、過去三世紀にわたつた「経済時代」の廢頽期にいま直面して、この「経済時代」の始動のエンジンをかけ、これを離陸せしめるに力を尽したひとりの人物の経済観の原型ないし経済発展の根源的意味をさぐることへの関心を離れることはできないのである。

1) Arnold J. Toynbee, *An Historian's Approp-*

- ach to Religion, London, 1956. p.180, 深瀬基寛訳『一歴史家の宗教観』p.280.
- 2) *Ibid.* pp.182-183, 邦訳, pp.283-284.
- 3) *Ibid.* p.186. 邦訳, pp.287-288.
- 4) Patrick Edward Dove, *Elements of Political Science*, 1854, Edingburgh. p.402.
- 5) Samuel Smiles, *Industrial Biography: Iron Workers and Tool Makers*, 1863, London. Chap. IV.
- 6) *Op. cit.*, p.60.
- 7) 高橋誠一郎『改訂重商主義学説研究』1940. pp.809-819. また『経済学前史』1929, pp.640-641. 『西洋経済古書漫筆』1947, pp.49-51.
- 8) 高橋誠一郎『改訂重商主義学説研究』p.809.
- 9) Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954, p.349 n. 東畑精一訳『経済分析の歴史』第2巻, p.737.
- 10) *Ibid.*
- 11) シュンペーターはこのことをヤラントンへの高い評価の、そして、同様に分析的貢献の点では欠けると見たダニエル・デフォー (Daniel Defoe) への彼自身の低い評価の理由として挙げている。経済書の範疇に属すると見られるデフォーの著述がさかんに世に出たのが1720年代であったのに対して、ヤラントンの書物はそれより約半世紀早く現れていたのである。Cf. Schumpeter, *Op. cit.*, p.372 n. 邦訳, 第2巻, p.785.

## 第2章 ヤラントンの著作 ならびに生涯

### 1 その著作

われわれは先ずヤラントンの著作ならびに生涯の輪郭を記述することからはじめる。最初に彼の著作を年代順に掲げ、その各々のプロフィールを示すとつぎのごとくである。

I) 『クローヴァーによる農地の大改良、或は、クローヴァーの驚嘆すべき利点とそれの正しい経営』 *The great Improvement of*

*Land by CLOVER: or, the Wonderful Advantage by and right management of CLOVER.* Lonon, 1661.

この書物の第1版が現存するかどうかは不明である。ロンドン大英博物館の図書館もこれを所蔵していない。筆者が参看したのは、同図書館所蔵の改訂第2版で、その標題は下のごとくになっている。

*The Improvement improved By A SECOND EDITION OF The Improvement of Land BY CLOVER: OR, The Wonderful Advantage by and right management of CLOVER.* LONDON: Printed by J. C. for Franeis Rea, Bookseller in Worcester, 1663. 8vo. pp. xiv+46.

ヤラントンは後に記すごとく農村の出身であり、また主著のなかで述べているところによれば、「大内乱」前の数年を農村で生活している。そして議会軍を除隊したあと1652年以来諸種の産業活動に従事したが、この間ふたたび農村問題に関心を寄せている。彼はいう、「私はライ麦農地の大きな弱点、ならびに、ライ麦の長年の耕作の結果として当時顕著になってきた土地の疲弊を研究した。私は実践 (Practick) と学理 (Theorick) の双方によって、疲弊の理由ならびにその回復の条理を発見し、二つの書物を公刊して矯正策を提示した…<sup>1)</sup>」

ここに彼が二つの書物というのは上掲の『クローヴァーによる農地の大改良』の第1版ならびに第2版を指すものであろう。つづいて彼はつぎのような回顧を行っている、

「この書物は農村人士の能力にうまく適合していたので、ひとはそれを読んでんやわんやの大騒ぎとなった。そうして、これは私の望みでもあり、また半ば事実として知るところでもあるが、ウースタ州 (Worcestershire), グロースタ州 (Gloucestershire), ヘリファード州 (Herefordshire), シュ

ロップ州 (Shropshire), および スタッファード州 (Steffordshire) の大部分は、彼らのために発見せられたこの農法によって農地価格を倍増するに至ったのである<sup>2)</sup>。」

農事指導者としてのヤラントンは経済論者としてのヤラントンとちがって啓蒙的企画者以上には高く評価されえぬ、というジュンペーターの指摘はさきに記したとおりであるが、ヤラントン自身にとってはその成果はかなり満足のいくものであったことがわかる。

彼がこの小著で呼びかけの対象とした人々には、勤勉な耕作農民 (Husband-man), 自由地保有権者 (Free-holder) および借地農 (Farmer) の各階層に及んでいて、彼の意図が純粋に農業技術的な増産にあることを示している<sup>3)</sup>。彼は当時のイングランドで農業技術の進歩と農地の改善を妨げている阻害要因として、(1) 無智、(2) 旧来の慣習の墨守、(3) 一文惜しみの銭失いのたぐいの手持ち原材料の不利用、(4) 能力以上の経営企図、(5) 資金の欠如(これに関しては著者は、本著述の指示と神に祝福される農民の勤労とによって速かに除去されるであろうという) の五項目を挙げている<sup>4)</sup>。

本書序文の末尾には、クローヴァーによる「異常利潤」のため人々が利潤の追求にあまり真剣になりすぎることがないようにと、「ある正直な農村人士」作の 65 行にわたる農業詩を「気晴らしのために」かかげる風雅を示している<sup>5)</sup>。ヤラントンはこの農業書の出版後もなお種子の改良およびその普及の事業を行っていた模様である。

Ⅱ) 『海と陸とによるイングランドの改善』  
*ENGLAND'S Improvement BY SEA and LAND*, pp. xx+195<sup>6)</sup>, with 8 folding plates. LONDON, Printed by R, *Everingham* for the Author, and are to be sold by Y. *Parkhurst* at the Bible and three Crowns

in *Cheap-side*, and N. Simmons at the Princes Arms in S. Paul's Church-yard, 1677.

この書物にはその内容を示すつぎの長い副題が添えられている<sup>7)</sup>,

『戦わずしてオランダにうち勝ち、  
貨幣を持たずして負債を支払い、  
わが国土の開発によってイングランドの  
あらゆる貧民を職につかしめんとする方  
策。

法律上の不必要な訴訟を防止する方策、  
併せて任意登記の便益。

造船用の莫大な量の木材が何処で得られ  
るかの指示、

併せてイングランドの諸大河を航行可能  
にすることの利益。

ロンドンその他の大都市の火災を防止せ  
んがための準則、

併せてロンドンの各種手工業職人組合が  
いかにすれば常時低廉に飲食物を確保し  
うるか、その方法の指示。』

ヤラントンが1677年という時期にこの書を公表した動機とそれに至るまでの事情については、同書巻頭の「読者に宛てた書簡」にくわしい。その主要部分を下に訳載するとつぎのごとくである、

「読者よ。あらゆる王国とコモンウェルスの富強の増進は、それぞれの国が交易 (Trade) のために占める位置の有利さに相応し、且つまた、よってもって他の隣国にうち勝つ正義と公平の法および慣習を自ら具備している程度いかに相応することに留意せられよ。われらは近年イングランドとオランダのあいだになんたる大いなる抗争、なんたる血腥い戦闘があったかを知っているが、これすべては交易という名の愛人 (The Mistress Called Trade) を獲得せんがためのものであった。また時としてイングランドの商人はオランダ商人がいかに交易上彼らをうち敗かすかを託ち、果ては自分らは生存できぬ

とまで嘆じた。かくて時の経過のうちに彼我双方は商人の権利を確定せんと口実のもとに蘭英両国間の戦争を勃発せしめるのであるが、講和の帰結たるや殆どいつでも商人は最悪の状態に陥り、イングランド国民の生活は殆ど改善せられず、要するに交易の進展は見られなぬ。<sup>8)</sup> ついで「読者に宛てた書簡」はたまたま1667年ごろヤラントンの試みた欧州大陸への産業視察旅行に話題を転ずる。これは彼の記すところによれば、「イングランドの12人の紳士たちに委託され、彼らにより旅費を支弁され、鉄および錫を材料とする製造業をサクソニイ (Saxony) およびボヘミア (Bohemia) からイングランドへ移植する目的をもって<sup>9)</sup>」行われた。しかるに彼が大陸ドレスデン (Draysden) に滞在してリンネル、ブリキ等の産業を視察中、チャタム (Chattam) においてオランダ人が英船を焼打ちしたことを知り、これを契機に彼は間もなく和解成立後のオランダに赴く。このとき以降彼の観察の視野はたんに産業の技術的側面にとどまらず、国民経済発展の基本問題にかかわってくる。そのことを彼はつぎのように述べる、

「私は私に与えられた数多の任務のなかから、別してイングランドの産業(Trade)がいかにして、いかなる方向に改善され進展されうるのであるか、自己のなし得るかぎり観察することをもって私の仕事とはした。そしてかの地の産業に関する観察をなしたとき、そのときはすなわち、同様な産業をイングランドに確立せんがためには、換言すれば、リンネル、縫糸、平打ちひも、およびブリキ板の諸産業を興し貧民を職に就かしめんがためには、留意せらるべき多くの点がいまだ残されていたときであったが、私はオランダに向った。それは恰もイギリス、オランダおよびスウェーデン間の三国同盟の

条約がブレダ (Breda) で締結された、その時期に当たった。そしてオランダでは、かの地の法律、習慣、公営の銀行、運河、港、砂州、そして統治と交易の政策、ならびに海と陸とによる同国の自然の防壁に関する観察に暫時を費し、万般の事どもを比較考量した結果として、戦争をもってしてはオランダを破る能わずと私は確信するに至った。<sup>10)</sup>

こうしてヤラントンはオランダの状態の考察と、それから産業交易の進展の上での英国の失策および英国の法律の欠陥を知ることによって、英国では「すべての調子が乱れている」ことを知覚したのであった。彼はその原因の追及のなかでつぎの重要な結論に到達する、

「われわれは戦争をもって彼らをうち敗ることはできなくても、他方、それと同じくらいに、われわれは戦わずして彼らを打ち敗りうるであろうこと、そしてこれこそわれわれの敵を屈服するための最善かつ最も正しい方途であることが私には明らかなものとなった。私の想像はいよいよ高まり、そしてそれが王国の公共の利益に立派に役立つであろうことを認識して、私はいまここに書き付けたすべての部分ならびに要点を、幾人かの貴族、幾人かの裁判官、法律家、紳士、商人、高級船員ならびに廷臣等々と幾百回も談合した。而して私が聞きえたいっさいの事柄、また私の所説に対して言われうるであろういっさいの反論に接したあとで、私は益々それが実行に移さるべきであるという確信を深めた。このことに関して私は当時準備にかかっていた出版を遂行するよう私に援助を申し出た多数の人々の激励を受けた<sup>11)</sup>。」

しかるにヤラントンのその出版を実現しないうちに1672年の英仏連合対オランダの戦争が勃発した。著者はいう、

「いまや均衡は破れた。しかも自分はオランダの(たとえば巨船建造の)準備を諒知している関係上、オランダは機会さえ見出すなら今までよりも一層大きな交易の伸長をめざしてその国旗を東方洋上に翫えそうと努めるであろうこと、しかもそれは英国国民によって妨げられないかぎりいずれかの海域で必ず実現するであろうことを、私は確信している。それゆえここに収める少数の紙葉は、いかにして戦争によらずしてオランダ人が撃破されるかを世界に向けて示さんがため公刊される。<sup>12)</sup>」

ところでこのような大目的を達成するために英国国民がなすべきことは、ヤラントンによれば驚くほど単純である。しかしその単純な議論のなかにこそヤラントンが把握した経済発展の論理はほのかに瞥見されるのである。

「その方法としてはただイングランドの自由地 (the Free Lands) を議会の法律によって任意登記制度 (Voluntary Register) のもとにおくことである。それに対する信用 (Credit) から銀行 (Banks)、質屋 (Lumberhouses) が発生し、これに伴って交易、運河、漁業および貨幣のなし得る他のいっさいの事柄を運営するに必要なあらゆる信用貸が起るであろう。こうしてこれが、交易の衰頹、フランスの勢力増大、その他の数多の事柄に伴って国民の胸中にわだかまる大なる危惧と不平を一掃するであろう。<sup>13)</sup>」

『海と陸とによるイングランドの改善』の冒頭におかれた「読者に宛てた書簡」は執筆の動機と意図をこのように語っている。

なお同書には二つの献辞があり、一つは御爾尚書アングルシー伯アーサー (Arthur the Earl of Anglesey) ならびにロンドン市収入役サー・トマス・プレイヤー (Sir Thomas Player) に、一つはウィンザー公ト

マス (Thomas Lord Windsor) に、そして最後のものはサー・ウォルター・ブラウント (Sir Walter Blount) 以下十名の彼の大陸旅行後援者にささげられている。そのなかでヤラントンは、本書に述べる所のものは「この25年間にわたる産業 (Trade) 上の私の観察と実践の選りすぐった部分<sup>14)</sup>」であるといい、「その大部分は近隣諸国においてすでに経験されたものであり、残余の部分は否定しがたい例証によって十分に証明済みのものである<sup>15)</sup>」と述べている。そして本書を「いま公刊するのは祖国に対する真実の愛のみに発するのであって、その祖国の繁栄こそいっさいの私の労苦から私が期待する唯一の報酬である<sup>16)</sup>」という。

本書には目次がなく章別もない。さきに示した長文の副題がその代用をしている。本書の本文は、著者自身のことばを使用すれば、若干の「理論」(“Theoretick”) と若干の「実際論」(“Practick”) とを含むものであるが、その叙述の様式に至っては平叙文による論述形式のもののほか、毛織物商・織元および自作小地主ら三人の対話篇、黒体文字をもって綴られた彼の「勸告」を示すいくつかの議案文案草案等を含んで著者ヤラントンの機略縦横の才が示され、統一性には欠けるけれどもきわめて多彩豊富な構成となっている。また本書にはヤラントン自身の制作になる大小8枚の銅版図面が折り込まれていて、本書の実践的性格を強調している。それらは内陸水路・運河港湾・穀倉の設計、或は1667年の戦慄すべきロンドン大火災の経験に鑑み彼がイングランド諸都市のため考案した消火器・給水桶・その運搬の馬匹と用具の様式・見張台等の図示にまでおよんで頗る具体的である。

Ⅲ) 『海と陸とによるイングランドの改善。第2部』 *ENGLAND'S Improvement By Sea and Land. The Second Part. Illustrated*



with Seven Large Copper-Plates. London, Printed, To be Sold by Tho. Parkhurt, at the Bible and three Crowns in Cheap-side, 1681. pp. vi + 212.

『第2部』は副題を伴わず、はじめて章別を行い全9章の構成となっている。ただしタイトル・ページには全巻の内容のなかからとくにつぎの6項目を択り抜いて掲げている。

- I イングランドの情況、各方面の成長、および製造諸工業。
- II 任意登記制度の便益と必要。
- III 英海軍を改善し、フランスの増大する勢力を減殺し、漁場を獲得する方法。
- IV 火災防止ならびに訓練された警防団の費用節減を目途とするロンドン市のための有益な諸提案。
- V サセックス州ニュー・ヘヴンに貨物船を入港可能にする方法。
- VI 錫、鉄、リンネル、および毛織物産業についての時宜にかなった議論。併せて上のすべての産業を改善するための有益な諸提案。

著者はすでに本書『第1部』の巻末において、もし同書の内容に対して文書で反論する者があれば将来公刊さるべき『第2部』のなかで同じく文書による応答をなすであろうと述べ、『第2部』に予定する内容として7項目を列挙していた<sup>17)</sup>。それと上に掲げた実際の『第2部』の内容とは全面的に一致しているわけではないが、いずれにせよ基本の趣旨は『第1部』に比べて変わっていない。なお『第2部』冒頭の「読者に宛てた書簡」(THE EPISTLE TO THE READER)は下のとおりで、本書の眼目を示している。

「読者諸賢よ。ここに私は事実だけを、或は教会法たと市民法たとを問わずおよそ法に触れることなくして(しごく当然に)事実と認められて然るべきもの

だけをおんみらに提示する。而してこれを読むにさいしては、その中の数箇の細目を十分に考量するまでおんみらの判断を早急に下さざるよう望む。何故ならおんみらはこの論説において私が主として目指すものを速かに見つけるであろうから。そはすなわち、この王国を、正直な安全な資金のもとに置くということ

(Putting This Kingdom under an Honest and Secure Fund), これである。私の言わんと欲するのは、その手段によってわが国の土地ならびにすべての不可減財(unperishable Commodities)が貨幣に匹敵する信用となりうること、この信用の欠如こそは地代の低下、貨幣の稀少、貧民の増加ならびに世間なみの正直の衰退(Decay of Common Honesty)へとわが国民を導いたものであるということである。而して必要なときにはいつでも貨幣が手に入ること、低い利子でしかも人びとがその所有主である事物の信用によって自己の職業に資金を供給しこれを改善することは、イングランドの人民の疑いなき利益である。本書にとりあげられた諸々の大切な事柄はその手段をとることによって完璧に達しうるであろう。遠からずして然あることこそ世の幸を祈るひと〔著者ヤラントンを指す一筆者付記〕の心底よりの願いである<sup>18)</sup>。」

この『第2部』の内容をなしている諸項目に若干の補足をする、最初の項目では当時のイングランドのいまだ限られた各方面の発達ならびに諸製造工業の情況に関する要約を与え、イングランドとアイルランドは北欧諸国のうちいまだ改善されずに残っている例外的な国であることを指摘する。また最後の項目に関しては、彼は国内錫産業の沈滞に言及したあと、それを鉄工業と結合することにより復活せしめる方法を提案している。彼はまたトタン板工業に関す

る自己の経験にかんがみ、特許権 (patents) 一般の効用についていろいろの疑問を提起し、特許権は産業を国外に放逐する傾向をもつと論ずる。この章の付録は、ヤラントン一流の機智をもって、コーンウォールの錫鉱山主、ディーンの森 (The Forest of Dean) の鉄鉱山主および旅人 (ヤラントン自身) の三人の対話を妙趣に富んだ筆致で綴っている。

IV) 『第一次長老教会派でっちあげ陰謀事件の真相の発見、或は、ロンドンの一居住者より田舎の貴頭に宛てた手紙』 *A Full Discovery of the First Presbyterian Sham = Plot, or A Letter from one in London, to a Person of Quality in the Country.* 4to. pp.16. London, 1681.

ヤラントンが二回目の農村生活をしている 1642 年に国王軍と議会軍とのあいだに「大内乱」が勃発した。彼は議会側を支持し、その軍隊に投じた。クロムウェルが権力を握ってからはヤラントンは大部分のプレスビテリアン派の人々と一緒に軍隊を退き、産業活動に献身するようになる。しかるに 1660 年チャールス二世の王政復古になると、ヤラントンの産業指導や河川調査等のための頻繁な国内旅行は、プレスビテリアン派の何らかの陰謀企図に関連するものではないかとの嫌疑を受け、彼は前後約 2 年間投獄の運命に際会した。しかし法廷での審理によって彼の無実が証明された<sup>19)</sup>。本冊子は事件後 10 数年を経て彼の晩年に近く自己の行動を弁護立証するために上梓したものである。

彼はこのなかでプレスビテリアンの反乱の企図と彼が関係があると見られたのは幾通かの偽造の手紙に原因があることを証明しようと試みている。これによれば最初の入獄中、彼の妻が偽造の詳細を知り、これを彼に知らせたため彼はその欺瞞を明らか

にして釈放されたが、さらに自己の無実と自己のうけた不当な待遇を国王に直訴せんとした行動に出たため相次ぐ逮捕に巻き込まれたものであるという。

V) 『ダンケルク町新築港および海上城塞地図』(ならびにそれを破壊すべき諸理由を包含する本文) *A new map of the town of Dunkirke new harbour and castle on the sea.* [With letterpress containing reasons for their demolition, etc.] London, 1681. s. sh. fol.

1681 年ヤラントンは交易ならびに軍事上の意図から当時イングランドに属していたダンケルク港の個人的な調査を行ったが、これはその成果を刊行したものである。ダンケルクの市街、港湾および海上の城郭の詳細な図面に説明文を添付している。この文のなかでヤラントンは、イングランドの交易の安全のために当時着工中であったダンケルク要塞の完成前にこれを破壊してしまうよう勧告している。彼によれば、ダンケルクの要塞化はいたずらにフランス王をして守備隊を駐屯させるのに役だつにすぎないという。

\* \* \*

ヤラントンの主著が現われて間もない頃、彼の『海と陸とによるイングランドの改善』の所説および彼の反カトリック的所信を誹謗する 4 ページのフォリオの冊子 [I] が、『コーヒー店での対話』というくだけた標題をもって流布された。当時コーヒー店はイングランドで流行しはじめ、一種の大衆社交場として繁盛していたものである。この反対論者は、まずヤラントンをもって、ロンドン市街の全部を悉く舟航可能の河川たらしめることにより、戦わずしてオランダを撃破すべき旨を纏説しつつある者と揶揄し、つぎに親カトリックのヨーク公が即位するのを阻止する意図を盛った排斥法案 (the exclusion-bill) の技術的

論議に移行するのであるが、そのなかでヤラントンはこの法案を支持する者と看做され、ひとりの若い法律家はその非を衝いてこれを糾弾するという趣旨のものである。

この『コーヒー店での対話』に反論してヤラントンを擁護する二つのパンフレットが1779年〔Ⅱ〕と1780年〔Ⅲ〕ごろ相次いで出版された。その著者の名は、ひとつは「王国の利益を希求する田舎の若干の隣人たち」（Well-wishers to the Kingdoms Interest）となっており、他のひとつは匿名である。それらは一応ヤラントンの同志の手になるものと推定されて然るべきであるが、二著のうち前者はヤラントン自身が著者である可能性を必ずしも排除しない。さらに1680年には上の弁護論を反駁して〔Ⅰ〕の冊子の続篇〔Ⅳ〕が現われている。これらの冊子はヤラントンがその中で生きた時代と環境を理解するうえで参考になる文献である。それらの標題は下のごとくである。

〔Ⅰ〕『コーヒー店での対話、或は、Y——大尉とミドル・テムブル所属の一青年法廷弁護士とのあいだの議論。Y. 公爵を排斥する法案への若干の省察を付す』 A Coffee-House Dialogue : Or A Discourse between Captain Y——and a Young Barrester of the Middle-Temple ; With Some Reflections upon the Bill against the D. of Y. pp.4. Folio. [London, 1679]

〔Ⅱ〕『“コーヒー店での対話”を吟味し、これを駁す』 田舎の若干の隣人たち、王国の利益を祈る者たち著。The Coffee-House Dialogue Examined and Refuted : By Some Neighbours in the Country, Well-wishers to the Kingdoms Interest. pp.2. Folio. [London, 1680?]

〔Ⅲ〕『“イングランドの改善”の正当性を論じ、その著者Y.大尉を“コーヒー店での対話”なる論説における中傷より弁護す。併せて右論説中の彼の発言に帰せられたる「カ

トリック教徒の計画」なるものを批議す』 England's Improvement Justified ; and the Author there of, Captain Y. vindicated from the scandals in a Paper called a Coffee-House Dialogue. With some Animadversions upon his Popish Designs therein contained. pp.4. Folio. [London? 1680?]

〔Ⅳ〕『Y.大尉とミドル・テムブル所属の一青年准男爵とのあいだのコーヒー店での対話のつづき。本文中においてさきの第一の対話はいっさいの細目におけると同様、某公爵に関する部分も立証せらる。また、英国改善論者の一人と称する者もその師Y.大尉と同様なんら深遠なる知力を持たざる人物なることが証明せらる』 A Continuation of the Coffee-House Dialogue, between Captain Y. and a young Baronet of the Middle-Temple ; wherein the first Dialogue is Vindicated, as well in that part that hath reference to the Duke, as in all other its particulars ; and in it one of the Improvers of England, is proved to be a Man of no deeper understanding than his Master Captain Y. pp.4. Folio. [London? 1680?]

- 1) Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, 1677, p.194.
- 2) *Ibid.*, p. 194.
- 3) Yarranton, *The Improvement improved by a Second Edition of The great Improvement of Land by Clover*, p.i.
- 4) *Ibid.*, pp. ii-x.
- 5) *Ibid.*, pp. xii-xiii.
- 6) 本書の最終ページは195ページとなっているが、72ページから96ページまでは脱落している。大英博物館所蔵本にはこれについて“a mispagination ; cf. our other copy, and Guildhall copy”とある。右のほか一橋大学メンガー文庫所蔵本および筆者の使用原本も同じ状態にあり、しかも71ページと97ページは前者最下段の重複語によって接続すること

が示されるから、この「脱落」は落丁ではなく明らかにページ付けの誤謬である。

- 7) こういう題名の付けかたが当時の流行であったことについては、高橋誠一郎著『西洋経済古書漫筆』1947, pp. 49-50を参照せよ。また上に記したヤラントンのクローバー農法に関する処女作第2版の題名も同様にして理解せられるであろう。なお主題である *England's Improvement by Sea and Land* の題名も、トマス・マン (Thomas Mun) の *England's Treasure by Forraign Trade* (1664) に対比するとき同工異曲であることが判明するであろう。
- 8) Yarranton, *The EPISTLE to the Reader, in England's Improvement by Sea and Land*.
- 9) Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, p.56.
- 10) *Ibid.*, *The EPISTE to the Reader*.
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*
- 13) *Ibid.*
- 14) *Ibid.*, To Sir Walter Kirtham Blount etc.
- 15) *Ibid.*, To The Right Honourable Thomas Lord Windsor.
- 16) *Ibid.*, To The Right Honourable Arthur Earl of Anglesey etc.
- 17) *Ibid.*, pp.194-195.
- 18) Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*. The Second Part, *The EPISTLE to the Reader*.
- 19) Samuel Smiles, *Op. cit.*, p. 63 ; cf. *Dictionary of National Biography*, vol. XXI. p. 1200.

## 2 その生涯

彼の生涯に関する資料は、自著のなかに含まれる伝記的記述、前記のサミュエル・スマイルズと『国民経済辞書』(*Dictionary of National Biography*) に彼の評伝を掲げたサー・アーネスト・クラーク (Sir Ernest Clarke) が調査した国内諸公文書の記録、これらが主た

る源泉であって決して多くはない。われわれが以下に述べる所も若干の原資料による記述を除いて多くはこれらに依存しなければならなかったのである。

アンドルー・ヤラントンは、スマイルズが教区記録および内国公文書 (*Domestic State Paper*) から調査したところによると、1616年ウースタ州アストリイ教区ラーフォド農場 (the farmstead of Larford, in the Parish of Astley, in Worcestershire) で生まれている。その一族は数世代にわたって同地方に在住し、ときに地方の宗教上・政治上の役職に就いている。アンドルーが自分自身の「教育および改善」について語っているのは16歳のとき以降に関するものであって、主著のなかでつぎのごとく述べている、

「現在の国王の誕生のころ (チャールズ二世、誕生は1630年—筆者付記) 私はリンネル商 (Linnen Draper) の徒弟であり、それから暫くの年月ひきつづいてその職業に従った。しかしこの仕事は私の野心の大きさにくらべてあまりに狭隘であったから、私は親方のもとを暇乞いした。その後の数年のあいだ私は農村の生活をした。過ぐる『大内乱』では一軍人であった。そうして軍隊に在団する名誉と退団の不運とを時々体験した。1652年には私は鉄工所の事業をはじめ、数年のあいだそれに精励した。この間時にイングランドの三大河川およびその他若干の諸河川の調査を自分の職務とした<sup>1)</sup>。」

これを見れば彼がなんらかの高等教育を学校でうけた形跡はない。彼のいう自分自身の「教育および改善」はすべて職業や軍隊或は自発的諸活動における実践を通じて体得されたものであった。それは労働が同時に学習であった人間の最も自然なありかたの時代を示すとともに、彼自身の才能や努力、そして綿密な注意力の程度を示すものであろう。ところでここに記されているように、彼がリンネ

ル商の仕事去って農村にあった1642年に勃発した「大内乱」は、彼の生涯にわたって大きな影響を与えることになった。

彼は議会側を支持し、すすんでその軍隊に身を投じた。はじめ一兵士として従軍した彼は、能力と熱心さを認められて将校となり、数年の後には大尉 (Captain) の階級に昇進する。1648年にはヘリファード州のドイリー・ハウス (Doyley House) その他のとりでに対する王党の占領企図を破挫した功により、彼は議会の感状ならびに当時としては巨額であった500ポンドの賞金を授けられている。彼はまた「大内乱」中に詐欺手段で得られた土地の諸権利を審査するウースタ州の役職に推薦されるのであるが、この職務における土地問題の経験が後年の彼の中心的主張の一つである不動産の任意登記制度確立の経験的裏づけになったと推測せられる<sup>2)</sup>。数年ののち議会軍が勝利を収め、オリヴァー・クロンウェルがほぼ実権を握ってからヤラントンは大部分のプレスビテリアンと行をともにして軍隊を退いた模様であるが、その精確な年代は明らかでない。しかし大尉ヤラントン (Captain Yarranton) の称号はその後の生涯を通じて、もうひとつの称号 Yarranton Gent. とともに公私の文書に見出されることになる。

1652年以降彼が産業に献身的に従事するに至ったことは上記のごとく自著の語るところであるが、彼が先ず従事したのは鉄工業および河川水路の開削であった。その年彼はウースタ州ビュードリー (Bewdley) に近いアシュリー (Ashley) に鉄工所を開いている。また彼はそれとともに「大内乱」によって窮乏していた貧民に職を与える方法を熱心に研究し、妻の助力を得てリンネル工場を設けている。彼は年少のときリンネル商の徒弟であったからリンネルの知識に富み、すぐれた良質のリンネルを生産することに成功したという<sup>3)</sup>。つぎに道路の劣悪による交通の困難が西部諸州の豊かな自然資源の開発を妨げてい

る事情を看取し、諸河川の舟航の改善に精力をそそぎ、かなりの費用を自己負担して諸水路の測量や開削に努めた。それが彼自身の産業活動を便利にし有利にすることにつながっていたであろうことを否定する必要はないが、しかしその活動の本質的公共性はこれを評価せねばならないであろう。

ヤラントンは先ず、セヴァン (Severn) 川の支流である小河川サルウォープ (Salwarp) 川を舟航可能にすることによって、ウースタ州中北部の塩産地に近いドロイトウィッチ (Droitwich) とウースタを結び、陸送による塩の多額の輸送費を軽減しようと企てた。「1655年にヤラントン大尉とウォール大尉 (Captain Wall) は総額750ポンドの費用でサルウォープ川を舟航可能にするため護民官からその実行の特許証書を得ようとして企画した<sup>4)</sup>。」同地方の議員もまた21箇年にわたる塩の現物支給をもって右の費用を将来弁済すべきことを約した。「しかし時世は不安定であり、ヤラントンおよびウォールは富裕でなかったため、これら両名は一般のプロジェクターよりも私心のない人物であったにもかかわらず、その計画は実施に移されなかった<sup>5)</sup>」という。

ウースタ州内のストアウ (Stour) 川を航行可能にすることもヤラントンの宿願であった。彼はストアウポート (Stourport) とキッドァミンスター (Kidderminster) を結び、さらに運河を造ってそれとトレント (Trent) 川を連結しようと企図したのである。この事業は若干の進展を見たが、資金の欠乏のために完成に至らなかった。同じ計画はそれから100年後に運河開削の天才ジェームス・ブリンドリ (James Brindley) の手によって完成を見るのであるから、ヤラントンの先見はここにも発揮されていたといえよう。ヤラントンはこの計画の挫折について『海と陸によるイングランドの改善』のなかでつぎのように述べている、

「それは私の企画であったが、それが完成し

なかった理由を言おう。ストゥア川その他の数河川は議会の決議によってさる高位の方々に認可が降りた。事業にはいくらかの進歩が見られたが、法令通可後暫時にして再び停頓した。しかしその事業はいわば私自身の子供のようなものであったから、私はそれが流産するのを欲しなかった。そこで私は、私と私の子々孫々に対する相続財産の三分の一を譲出してそれを完成したいという申し出を行い、われわれはひとつの協約に到達した。これに基づいて私は行動を始め、ストゥアブリッジからキッドギンスターまでを完全に舟航可能にし、これによって数千トンの石炭が水上を運搬された。投下金額は約1000ポンドに達したが、その所で資金の欠如——これは協約によって支払われることになっていた部分であるが——のため阻まれた<sup>6)</sup>。」

ヤラントンのいまひとつの同種の計画は、運河の開削によってセヴァン (Severn) 川をテムズ (Thames) 川と連結しようとするものであった。この運河の測量は彼の指導のもとに彼の息子ロバート (Robert Yarranton) によって二回実施されている。彼が計画した運河開削の場所は彼の死後一世紀を経て当時の技術者によって現実に開削された所と完全に一致することはスマイルズの指摘するところである<sup>7)</sup>。ちなみに息子ロバートは父アンドルーの河川測量家たる一面をうけつぎ、後に父の指導のもとオックスフォード市と同大学のためにオックスフォードとロンドン間の舟航改善の事業を行っていることは注目に値しよう<sup>8)</sup>。ヤラントンのこの時期における水路開発の事業は多くは資金の欠如のため挫折したものと多くであるが、この事業への彼の傾倒は晩年までつづき、より実質的な成功はその時期に収められるのである。

農業の改善もまたこの時期におけるヤラントンの精力的な活動分野のひとつであった。彼はライ麦の長期間にわたる耕作と反復的な収穫とによって土壌が疲弊しているのを看取

し、農地が休閑或は少くとも輪作を必要とすることを熱心に勧説した。彼はそのためにクローヴァーの種を導入し、西部諸州の農民にひろく供給して農地の改良を計ったのである。このクローヴァー農法に関する彼の二つの著述が1660年代のはじめに現われていることはさきに記したとおりである。ヤラントンは英国でクローヴァーの経済的価値を認めた最初の人物のひとりであり (サー・リチャード・ウエストン Sir Richard Weston に次ぐ<sup>9)</sup>、彼が唱道したこの新しい農法は程なくしてイングランド全体に採用されるに至ったといわれる<sup>10)</sup>。

1660年チャールズ二世の王政復古が成ると「大内乱」以来の政敵のねたみや敵意もあってヤラントンの活動は当局者の嫌疑を招いた。各種の産業指導や水路開削のための彼の頻繁な各地への徒歩旅行が、プレスビテリアンのなんらかの陰謀の企図に関係があるのではないかと疑われたのである。かくてヤラントンはウースタ州太守ウインザァ卿 (Lord Windsor, Lord-Lieutenant) によって「太守の権威を拒否するものとして」投獄されたが、翌1661年11月には釈放された。しかるに釈放後直ちに、プレスビテリアンの反乱の企図に関係した幾通かの手紙の「発見」によって彼はふたたび拘置された。翌1662年5月の末には「危険人物アンドルー・ヤラントンの憲兵司令部拘置所からの脱走」がウースタから報告されている<sup>11)</sup>。彼は自己の無実と「彼が受けた大なる不当行為を国王に知らせる<sup>12)</sup>」目的をもって、州当局者の追跡をうけながら、単身ロンドンに赴いたのであるが、逆に令状をもって再逮捕されるに至った。しかしまもなく釈放されてウースタに帰ると、こんどはそれから六箇月もたたぬうちに「国王に対する反逆の言辞を弄した」かどで四度目の逮捕をうけている。この事件は買収された人物の虚偽の通報に基づいて起こったものであることが陪審廷において立証され、彼はようやく

にして無罪を言い渡されるのである<sup>13)</sup>。このようにして「宗教戦争」の余波によって彼が投獄または拘留されていた期間は通計2年に近い。彼はいわば時代の傷を一身にうけねばならなかったのである。晩年に及んで彼が『第一次長老教会派でっちあげ陰謀事件真相の完全な発見、或は、ロンドンの一居住者より田舎の貴顕に宛てた手紙』を公刊して、この間の仔細を語ったことは前節で記したところである。なおヤラントンと長老教会派の関係としては、国内公文書に1672年にプレステリアン礼拝所として官許をうけた人物として「ヤラントン夫人」の記録が残されており、これがおそらくアンドルーの妻を指すのであろうと『国民伝記辞書』の執筆者は推定している<sup>14)</sup>。

艱苦をきわめた60年代初頭の2年が経過したあと、自由の身になったヤラントンはふたたび鉄工所の仕事と西部諸河川の水路開発の事業に復帰している。そしてほぼ1667年と推定せられる時期に、おくれたイングランドに対比して先進的であった欧州大陸への産業視察に出発することになるのである。

この企図はもともと彼の鉄工業における経験に由来した。すなわち17世紀中葉の当時あってはイングランドの工業技術は低調で、大陸にくらべてははっきりと技術的に遅れをとっていた。イングランドには豊富な錫鉱はあったが、錫の加工製品はすべて外国に頼る有様であった。サクソニーはイングランドの錫の主要な輸出先であるとともに、イングランドに対するブリキ板の殆ど独占的な供給者であった。この時期までイングランド国内でブリキ板を製造しようとした試みはすべて失敗に終わっていた。鉄を十分に薄く滑らかな薄板に打ち延ばし、その表面に錫の薄膜を付着させることは当時のイングランドの技術では不可能事に属したのである。ヤラントンの旅行の当初の意図はこうした技術的困難を克服する方法を大陸において探ることであった。この

ため彼は、彼の意図を、鉄工業に理解あるきわめて富裕な人物と相談したのち、その人物を含む12人の紳士たちとひとつの協約をとりきめた<sup>15)</sup>。これは彼らがヤラントンおよび同行の通訳の旅費を支弁し、これに対しヤラントンはブリキ板製造の技術を大陸に探ってくれを持ち帰るという内容であった<sup>16)</sup>。

ヤラントンはこのようにしてドイツに渡り、当時サクソニー公の宮廷のあったドレスデン(Dresden)で、かの地の人々の予期せぬ好意的態度と一行の熱心とによって完全に所期の目的を達成した。彼はまたそのさい、当時8万人の生計を支え<sup>17)</sup>たサクソニー錫工業のそもそもの技術的確立者が、16世紀前半のクイーン・メリー一世治下の英国を追放されたコーンウォール(Cornwall)出身の一プロテスタント英国人と、ルーテル派に改宗したボヘミアの旧カトリック僧のふたりであったことを見出すのであるが<sup>18)</sup>、これは当時の宗教戦争と産業の技術的確立のあいだに見出されるさきにトインビーの指摘したごとき関係の典型として注目し値するであろう。

つぎに彼はドイツ各地のリンネルおよびその関連産業、さらには少女のための産業訓練学校、或は多目的の穀物倉庫を視察し、イングランドの状況と比較してとくに貧民の授産と食糧の安定供給について深い印象をうけた様子を伝えている。また彼は後年サクソニー等ドイツ諸国の消防施設に学んだことを記しているから、彼の視察の範囲はきわめて広くその観察は綿密であったことが想像される。このドイツ視察のあいだに第二次蘭英戦争のチャタム事件が起こり、その暫く後に和解成立後のオランダへ彼が赴いた事情についてはすでに触れたところである。

ヤラントンのオランダ視察は従前の産業技術的視点をはるかに超えて全く国民経済的視野のなかで行われることになった。この飛躍の端緒となったものはもとより蘭英二国間の軍事的抗争であり、そしておそらくはドーヴ

やスマイルズの強調するときヤラントンの「愛国心」であったろう。ヤラントンはオランダの内陸水路やリンネルその他の製造業を視察し、当時世界で最も労働に精励し最高の繁栄を享受しつつあった同国民を観察していくあいだに、当時のイギリスにおける産業の不活発ないし衰退に比べて世界の製造業・海運業の覇者であったオランダの非常な活況に心打たれ、その原因は何なのか、このオランダの実例から有益な何ごとかを学べないかどうかを鋭意たしかめようと決意したのである。それを究めることはおよそ経済発展機構の根幹にまで迫ることを意味した。こうして従来たんに個別産業或は内陸水運の実践的指導家であったヤラントンは、ここに政治経済学者ヤラントン或は経世家ヤラントンへと大きく飛躍することになる。そしてその成果がやがて10年ののち『海と陸とによるイングランドの改善』のなかに凝集し、今日われわれの繙読に堪えているのである。

さてその主著の輪郭の簡単な紹介は前節で示した。またその内容のくわしい吟味は次章以下のわれわれの主題であるからここでは触れないことにする。ただつぎのことを指摘しておくのは適当かも知れない。それはヤラントンのかかわっているのが一方では表面上殆ど「実践的」な論議であることと、それから他方では議会や有識者、産業関係者或は労働者、また或るときは労働者家族に対する「勧告」であるということである。このことはまた彼のこうした議論や勧告の基礎が、内外の旅行による観察を含めた彼の「25年」(『イングランドの改善』献辞)にわたる「経験」に基づいていることを意味する。したがって彼は経済研究者ではあっても、当然のことながらいわゆる学者とか理論家ではない。そのことに関連する一例として彼の主著のなかで言及された他の著者と著述を挙げれば、僅かにウィリアム・テムプル(William Temple)とロジャー・コーク(Roger Coke)の二人のものが見

出されるにすぎない。彼の議論はまことに高橋誠一郎博士の指摘したごとく「実証論的経済学」なのである。しかしそのゆえにもしひとが経済学的に価値が少いと考えるならば、それはまったく誤った見解といわねばならないであろう。なぜなら、この時期における重商主義的著作一般に関してシュンペーターが指摘したように、この時期においてはそうした「勧告」や「実践的」論議のみが「理論的知識の萌芽たるべき宝庫に探りを入れる唯一の可能性」を提供しているからである<sup>19)</sup>。また理論に関係ある部分を除いても、その内容はきわめて豊富であって、そのなかにはその時代における人間と経済の関係を証(あかし)する貴重な資料が含まれている。われわれは彼の著書の性格と意義についていまこれだけのことを述べておきたいと思う。

大陸の旅行から帰ったあとのヤラントンは、法律家、政治家、産業者など、貴族から庶民に至るほとんどあらゆる階層の人々に対して熱心に彼の所説と計画を説いた。実践的な活動としては、彼はやはり鉄工所の仕事をつづけたが、他面一種のコンサルティング・エンジニアになった観があり、イングランド全国各地を訪れ、鉄工所、運河、その他殆どあらゆる種類の改善に助言と勧告を与えた。「イングランドの改善」が文字通りに彼の活動目的となったのである。そのなかには新しく漁業振興のための運動が含まれていた。当時オランダのにしん漁帆船はイングランド沿岸にまで群をなして活躍し、沿岸民は徒らに坐視するのみであったから、ヤラントンにはこの状態がきわめて遺憾なものと思えたのである<sup>20)</sup>。また彼は当時イングランドの主要港における船荷作業が設備の貧困のためにいかに手間どっているかを見て、ロンドン港の調査をして係船渠の設計を行った。しかし彼の熱心な唱道にもかかわらず支持者は少く、彼の計画は実らなかった。ロンドンの海運業者は19世紀のはじめまでテムズ河の混雑した潮



路でその作業を行わねばならなかったのであるから、彼の計画は約100年も時代に先んじていたことが知られる<sup>21)</sup>。

1674年7月には彼は「チェスター(Chester)市を通過してアイルランド海にそそぐディー(Dee)河を調査測量をするようにさる高位の人物から説得されたが、その河が土砂でふさがれていて二十トン以上の舟はその高貴な都市に這入れないのを見出した<sup>22)</sup>。」そこで彼は「その市街の側面まで船を溯航させる新河川開削のための図面」を作成した。これはディー河とセヴァン河とを連結しようと試みるものであった。またこの年の11月にはアイルランドに新しい製造業を興す目的で「鉄工所、森林および農地の調査のため」旅行を行っている<sup>23)</sup>。彼はスレエン河(the River Slane)を航行可能にするための調査をし、ダブリン(Dublin)港改良計画を提案した<sup>24)</sup>。つぎに彼は「クラレンドン卿(Lord Clarendon)に委嘱されてソールズベリー(Salisbury)のエイヴォン河(the River of Avon)を調査し、その舟航実現の可否ならびにクライスト・チャーチ(Christ Church)に船舶の出入碇泊の可能な安全港の建設の可否を答申した<sup>25)</sup>。卿はヤラントンの勧告にしたがって安全なる泊地の建設を実行したことが記録に残っている<sup>26)</sup>。かつて彼を逮捕したウインザー卿(Lord Windsor)が彼に依頼して「ウースタ、グロースター、およびウォーウィック州を流れる」別のエイヴォン河(the Avon)を調査測量せしめたのもほぼこの頃と推察せられる<sup>27)</sup>。ヤラントンはこのエイヴォン河の水路開削に成功し、チュークスベリ(Tewksbury)から文豪シェイクスピアの生地ストラットフォード(Stratford)に至る河面にはしけを滑らせた最初の人物となったのである<sup>28)</sup>。

彼の大計画のいまひとつのものはイングランドの中部諸州にリンネル工業を確立することであった。彼が明らかにしたところによれば、この地方はすぐれて亜麻の生育に適合し

ている。そうしてもし彼の運動が成功するならば、当時外国産リンネルの購入のため流出していた少くとも200万ポンドの金額が国内に保持され、そのうえ亜麻が生育する農地の価値を高め、さらに当時仕事がないために移民として出なければならなかった国民に有利な雇用を与える筈のものであった。このように貧民に職を与えることは、われわれのすでに知るように、青年時代以来の彼の念願の一つであった。「ただ怠惰とそねみのみが、私の労苦が望み通りの成功の栄冠に到達するのを妨げうるであろう。怠惰に対するわが国民の常習的愛好はすでにわれわれを破滅の淵にもたらした。そうしてそねみに陥りやいわが国民の傾向はわれわれの将来の幸福に対するすべての敬虔な努力をほとんど意気沮喪させるところまでいった<sup>30)</sup>。」彼がかく語るところより、彼の企図は一方でイングランド人の怠惰に対するインダストリの奨励であったが、それは他方では彼が英国国民のいまひとつの欠点と見たそねみからくる敵意と嘲罵につねに直面しなければならなかったのである。

ヤラントンの主著『海と陸とによるイングランドの改善』が世に出てまもない1679年ごろ、「大内乱」に由来する彼の古い政敵たちは一斉に立ちあがって公然と彼を揶揄攻撃した。前節の末尾に掲げた数種の印刷物がその明白な証拠を提供している。それらはヤラントンの諸々の「改善」計画の失敗をなじり、或は王政復古後の王室に対する彼の「不忠」を捏造ないし暴露せんとする執拗な試みであった。しかしそれらもヤラントンの素志を阻むことはできなかったようである。彼は1681年に『海と陸とによるイングランドの改善。第2部』を本文212ページの小型四ツ折本で公刊しているし、また『第一次長老教会派でっちあげ陰謀事件の真相』を公にしたのも同年であった。また彼はこの年当時イングランドに属していた大陸対岸のダンケルク港に赴き、軍事面を中心とした市街および港湾の調

査を行ってその結果を公刊したが、これについては前節でその内容の要領を記述した。

このように1681年はヤラントンにとって収穫が多い年であった。しかしこの年以降の彼の消息については杳として何事も知られていない。サー・アーネスト・クラークは『国民伝記辞書』のなかに「ヤラントンはおよそ1684年ごろ死亡したと信ぜられる」と述べ、精確な年月については疑問符を残さねばならなかった<sup>31)</sup>。また伝記作家サミュエル・スマイルズは綿密な探究にも拘らず彼がいつ、どこで死んだかについてなんらの手掛りも得られなかったと報告し、悲痛にも「われわれは彼の墓石が建てられたかどうかさえ知らない」と記さねばならなかった。スマイルズは彼の墓石を見出せなかったけれども、スマイルズが著書のなかに刻みつけたつぎの諸文字は彼がヤラントンのために撰んだ墓碑銘として読むことができるように思われる——

「ヤラントンは、その見解がはるかに時代に先んじていた人物であった。彼がその人々のために労苦し著作したその世代は、彼の見解をうけいれこれを実現するにはいまだ熟していなかった。彼の声は荒野に叫ぶ者のごとくに人々のあいだに響いた。しかし彼の熱心な産業のすすめと国民的進歩の大計画とは彼の生存時には実現されえなかったけれども、彼は土壌を耕し種を蒔いたのであった。そうして今日この時でさえわれわれは或る程度まで彼の労苦の果実を収穫しつつけている。ともあれ彼の著書は、イングランドの産業的繁栄を堅実な礎石の上に確立する真の方途に関してアンドルー・ヤラントンがその同時代人を超えていかに思慮あり、いかに賢明であったかをいまなお示している<sup>32)</sup>。」

1) Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, pp.193-194. なおここでヤラントンが「三大河川」といっているのはテムズ (Thames), ハムバ (Humber), セヴァン

(Severn) を指す。 Cf. *Dictionary of National Biography*, vol. XXI p.1200.

2) Dove, *Op. cit.*, p. 407; cf. Smiles, *Op. cit.*, p.61.

3) Yarranton, *Op. cit.*, p.56.

4) *Dictionary of National Biography*, vol. XXI, p.1199.

5) *Ibid.*, quoted from Nash, *Worcestershire*, 1782, i. 306.

6) Yarranton, *Op. cit.*, pp.65-66.

7) Smiles, *Op. cit.*, p.65. cf. Yarranton, *Op. cit.*, p.65.

8) Yarranton, *Op. cit.*, p.189.

9) *National Biography*, XXI, p.1199.

10) Smiles, *Op. cit.*, p.65.

11) *National Biography*, XXI, p.1200.

12) Yarranton, *A Full Discovery of the First Presbyterian Sham = Plot*. London, 1681.

13) *Ibid.*

14) *National Biography*, XXI, pp.1200-1201.

15) その氏名については *England's Improvement*. の第3の献辞参照。

16) Smiles, *Op. cit.*, pp.66-67. またヤラントンの Sir Walter Kirtham Blount ほかへの献辞 (Yarranton, *Op. cit.*) を見よ。

17) 一行はイングランド帰還後良質のトタン板製造実験に技術的に成功したのであるが、その生産の実行ならびに指導普及は阻まれた。これは彼の敵手に技術の秘密が洩れ、その人物が政治上の有力者の後援を待んでパテントをもつと称して、ヤラントンらの生産実施を妨げたからである、という。 Cf. Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, The Second Part, 1881, pp.151-152.

18) Smiles, *Op. cit.*, pp.67-68.

19) Schumpeter, *Op. cit.*, p.356. 邦訳, 第2巻, p.752.

20) Smiles, *Op. cit.*, p.70.

21) *Ibid.*, pp.65-66.

22) *Dictionary of National Biography*, vol. XXI, p.1200.

23) *Ibid.*

- 24) Smiles, *Op. cit.*, p.70 ; Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, p. 39.
- 25) Yarranton, *Ibid.*, p. 39, 41, 151.
- 26) John Chambers, *Biographical Illustrations of Worcestershire*, London, 1820, quoted in Smiles, *Op. cit.*, pp.70-71.
- 27) Yarranton, *Op. cit.*, p.189 ; *Dictionary of National Biography*, vol. XXI, p. 1200.
- 28) Smiles, *Op. cit.*, p.65.
- 29) *Ibid.*, p.71.
- 30) Sir Walter Kirtham Blount ほかへの献辞より引用。See Yarranton, *England's Improvement by Sea and Land*, 1677.
- 31) *Dictionary of National Biography*, vol. XXI, p.1200.
- 32) Smiles, *Op. cit.*, p.76.